

世阿彌の「拾玉得花」について

野 間 光 辰

『拾玉得花』は、これまで長年の間、金春禪竹の著作であると考へられてゐたのであるが、最近になつて、實はそれは誤であつて、觀世世阿彌が禪竹に與へた傳書であることが明かにせられた。けれどもその内容は、なほ確認せられるに至らなかつた。といふのは、從來禪竹の作と信じられてゐた『拾玉得花』が、果して世阿彌の作にふさはしい内容を持つものであるかどうか、斷定に躊躇せられたからである。それにはどうしても、確かに世阿彌の著作であることを納得させるに足る、新しい證本の出現が必要であつた。随つて『拾玉得花』は、改めて世阿彌の著作集に加へられるやうにはなつたけれども、内容未確認のゆゑに、單に參考として附載せられるに過ぎなかつたのである。しかるに此度、文學士金春晃實君によつて、この學界多年の宿題を一舉に解決するに足る證本が発見せられた。それがここに紹介しようとする、金春流宗家金春信高氏所藏の『拾玉得花』である。

金春宗家所藏本は、大本袋綴一冊、墨付二十四丁、奥に禮紙四丁を附す。紺表紙裏の見返しには、金地に丸に鷹の羽の喰違ひと丸に五つ寶形の紋を空捺しにした料紙が用ひられてゐる。表紙に外題書はないが、第一丁扉の左肩に「拾玉得花」の四字を墨書してある。これこそ紛れもない『拾玉得花』の現存唯一の傳本である。

金春宗家所藏本は、しかし、世阿彌が禪竹に附與した自筆の原本ではない。その奥書が示すやうに、六代八郎安照（法名

禪曲、元和七年八月二十一日卒、年七十二）の次男八左衛門安喜（法名淨元、寛文元年六月十五日卒、年七十四）が、明暦二年正月二十一日付を以て、養子七左衛門元喜（法名淨徹、貞享二年卒、年六十）に附與相傳した轉寫本である。七左衛門は安喜の兄七郎氏勝（法名清本、慶長十五年八月三十日卒、年三十五）の女を母として、加賀藩抱への能役者林長兵衛の次男に生れ、幼名を五郎作といったが、故あつて正保四年二十二歳の時、養はれて安喜の子となり、七左衛門元喜と稱した。その間の事情は、『金春家祖先並藝傳來之由緒帳』ならびに『秦宿禰竹田金春家略系』等に詳しい。そして養父安喜が落髪入道するに及んで、家督を相續して八左衛門を名乗り、晩年に至つて元喜を照喜と改めたといふ。この七左衛門元喜を養子に迎へてから間もなく、衰老退隱の期近きことを悟つた安喜は、あらかじめその時に備へて、承應・明暦の間にわたつて、家藝一通りの傳授を元喜に相傳した。大正四年三月吉田東伍博士が集刊された『能樂禪竹集』は、その多くをこの八左衛門流の副本によつたといふことであるが、右『禪竹集』所收の『至道要抄』は承應四年に、『歌舞體腦記』は明暦二年三月十七日に、それぞれ安喜の奥書を附して元喜に與へたものである。又、昭和十六年の頃、川瀬一馬博士が大和駒岡乘圓氏所藏の金春家舊藏傳書類の中から發見して、新たに世阿彌の著作に加へられることになつた『六義』と『遊樂藝風五位』の兩書も、前者は明暦二年五月六日に、後者は同じ年同じ月の十一日に、やはり安喜から元喜に附與した寫本によつて、初めてその内容が明かになつたものである。今は金春宗家に傳へられてゐる『拾玉得花』も、もとはこれらの傳書類と相前後して、安喜から元喜に相傳せられたものであつた。

八左衛門安喜は、家筋からいへば、金春の庶流である。庶流の八左衛門家に、一子相傳の、家の大事の傳書類が寫し傳へられたことについては、そこに理由がなければならぬ。本書の安喜の奥書には、「歷代祕曲、傳家督一人、而其他庶子傍孫、遂不能窺闔奥於萬一矣」といひ、しかし「如是、兄七郎氏勝、不幸而早世故、老父、家傳之祕奧相續、而欲傳之子々而孫々、而以殘萬世、悉家傳祕曲教授、於所令相傳也」と説明してゐる。安喜の兄氏勝は、三十五歳の若

さて、父に先だつて死んだ。父安照は時に五十三歳、既に家督を氏勝に譲つて隠居の身分であつたが、嫡孫七郎重勝（法名宗竹、寛永十一年九月四日卒、年三十九）が當時まだ十五歳の若輩であつたため、再び金春太夫の職に復し、重勝の藝事指導に努めることになつた。しかし何分にも老齡のことである。そこで自分の死後に於ける家藝の相續ならびに重勝の後見のことを慮つて、次男の安喜に「累代一人相譲之嫡傳口決、不_レ殘一事_二令_二教授_一、使_二家書悉寫_一之、加_二證據之名判_一而與_レ之」（『秦宿竹禪田金春家略系』）。これが「庶子傳受之初」であつた。『金春家祖先並藝傳來之由緒帳』には、「家傳之儀は、次男八左衛門安喜に、不殘傳授仕候、歌舞根本一子相傳を庶子に傳授仕候最初に而御座候」とあつて、あたかも安喜だけに家傳の傳授を免許したかのやうに記してゐるが、三男氏紀にも一部を相傳、書寫せしめたことは、庄左衛門家に元和三年氏紀書寫の『花鏡』の轉寫本が傳へられてゐたことによつても明かである。

それはともかく、かうして金春家傳の祕書類は、庶流の八左衛門家にその副本を傳へることになつたが、やがて元和七年に安照は歿した。嫡孫の重勝は既に三十歳に達してゐたが、安照は何故か家傳の書物を一旦元喜・氏紀の兩人に預け、所領五百石を分つて三百石を重勝に、百五十石を元喜、五十石を氏紀に配當して死んだ。これが後に重勝と元喜との間に確執を生ずる原因になつたのであるが、しかし家傳の書物は安照の死後間もなく、十月八日付の元喜・氏紀兩人連署の讓狀を添へて、重勝の許に送られた。その讓狀は「金春家之書物之日記、七郎殿へ渡申候書物覺」と題し、「次第不同書物以上貳拾貳」部を列記した末に、なほその外に「松下云事之狀あまた」及び「世阿彌諷本五番」を附記してゐる。そこに著録せられた「風姿花傳 一冊」・「花のか、み_{又クワキヤ}同_{ウとも云}」・「至花道同」・「世阿彌諷本五番」は、先年川瀬博士が駒岡乘圓氏所藏の金春家舊藏傳書類の中から發見せられたのであつたが、しかし「拾玉得花同（一冊）」はその中にはなかつた。しかし、やはり川瀬博士が金春家舊藏傳書類の中から見出された、十四代七郎氏綱（法名禪林、安永七年正月十三日卒、年七十二）の自筆書留には、世阿彌・禪竹兩名の奥書の全文、もしくは兩奥書の年月署名のみを抄記したものなど、すべて五種に及

んでゐるさうであるから、その頃までは金春宗家に相傳せられてゐたことは間違ひはない。恐らく明治維新前後に、世阿彌自筆の原本は金春宗家から流出し、八左衛門家所傳の副本も亦篋底に秘められたまま、いつとなくその存在を忘れられてしまつたものと見える。それ以來『拾玉得花』の正體が不明になり、その作者に關して大きな誤が傳へられることになるのである。

もつとも、吉田博士が『拾玉得花』を禪竹著述の一と認めて、これを『禪竹集』に收められたことについては、それにはそれだけの十分な根據があつた。即ち博士は、専ら八左衛門家相傳の副本を底本として『禪竹集』を集刊せられたのであるが、その際、八左衛門家七代の安住（文政十三年五月七日卒、年七十）の輯録にかかる『系譜集錄』所收の前記「金春家之書物之日記」に基いて、その書目の中から、當時存亡不明であつた『花鏡』・『已心集』・『翁之大事』等、及び既に明治四十二年二月に『世阿彌十六部集』に合刊した『風姿花傳』・『至花道』・『人形日記』（二曲三體繪圖）、更に現存する禪竹の著作『五音三曲』・『歌舞髓腦記』・『六輪一露之記』・『五音』（五音次第）等を順次消去して、最後に残つた『拾玉得花』を、天文年中の笛師中村親能の能舞笛祕傳書『金瑠落梅』中に收められた、康正二年九月二日金春氏信の署名ある一篇であると認めたのである。何となれば、「禪竹の奥に書ける和歌に、うかびいでて、かかるもくづの花もさけ、きよきなぎさの玉の光にとよめるに合せ考へて、確と悟らるればなり。句中に、花の開く、玉の光るといふは、やがて玉を拾ひ、花を得る意なること、明白ならずや。されば、今は題銘をば拾玉得花と押して、此に挿入す」といふのであつた。そして「其内容の五音十體は、世阿彌の五音説を廣めて、更に十體の説を立てたる者」とせられたのである。以來『拾玉得花』は常に禪竹著述として論ぜられ、吉田博士認定の本文を引用するのが例となつた。昭和七年六月野々村戒三氏新編の『金春十七部集』にも、禪竹篇には新たに『五音の能の心持の事』と『百ヶ條』の二部を増補した以外には、他はすべて吉田博士校訂の本文を再録し、これにやや詳しい頭注を加へるとどまつてゐる。そしてここでも、『拾玉得花』を禪竹作とし、吉

田博士認定の本文を再録すること、他と同様であつた。

しかし吉田博士が『拾玉得花』と認定したのは、實は應永二十七年三月世阿彌在銘の『音曲五位』（假題）の後半、「音曲習道五位音之次第」に、「十鉢の風姿」を添加したものであつた。川瀬博士は寛永頃の書寫と推定せられる虎菊三郎自筆本の轉寫本を紹介して、これは禪竹が世阿彌の「音曲五位」の説に、おのれの「十鉢」の説を附加したものであると説いたが、これに對して小林靜雄氏は、『拾玉得花』の前半後半共にやはり禪竹の著作であり、かつ新發見の『音曲五位』の作者も亦禪竹と認めるといふ反論を發表して争つた。この論争は、しかし、前に述べた金春氏綱の自筆書留の發見によつて、川瀬博士の勝利に終つた。けれども、問題は依然として後に持ち越された。何となれば、『拾玉得花』は世阿彌の著作であることが判明したものの、なほその正體は判らないからである。そこで川瀬博士は、吉田博士認定本は、その前半は世阿彌の「五位音之次第」、後半は禪竹の「十鉢之事」であると考へた前説を翻して、前半後半共に世阿彌の著作であつて、卷末に附せられた康正二年の禪竹の奥書を除いたものが世阿彌の『拾玉得花』の全容であると考へるに至つた。そして昭和二十三年三月に刊行せられた『^{注頭}世阿彌二十三部集』には、康正二年の禪竹奥書の代りに、氏綱書留に見える『拾玉得花』の奥書全文を附けて、吉田博士認定本を三度收録してゐる。もつともそれは、多少の留保を附して、参考の意味に於て附載せられたのであつたけれども。

もし『拾玉得花』の正體が、果して川瀬博士所説の通りであるとすれば、それは世阿彌ならびに禪竹の能樂論について、從來考へられてゐたところを訂正しなければならぬほどの、大きな問題を提供することになるであらう。前半の音曲を祝言・幽曲・戀慕・哀傷・闌曲の五位に分つことは、新しく發見せられた『音曲五位』の後半そのままであり、それは更に『五音曲條々』や『五音』に敷衍發展せられ、禪竹に繼承せられては『五音次第』や『五音三曲集』の所説となつたこと、既に周知のところであるから、ここには特に取上げていふほどのものはない。ただ問題は、後半の十鉢の部分である。世

阿彌は『花傳第七別紙口傳』や『花鏡』・『世子六十以後申樂談義』などに、屢々能の十躰について言及するところがあつたが、その十躰の名目の一々は不明であつた。多分それは、『風姿花傳第二物學條々』に「いふ老人・女・直面・物狂・法師・修羅・神・鬼・唐事の九項目を、おほよそに引つくるめて十躰の名を以て呼んだのであつて、『拾玉得花』の後半に見える、祝言・幽玄・戀慕・哀傷・闌・麗體・遠白體・濃體・有心體・事可然體の十體の如きは、歌道思想を能樂論に取入れた禪竹の考案になるものとせられてゐたのである。しかるに今、その『拾玉得花』の後半も亦世阿彌の作に成るものとすれば、世阿彌のいふ能の十躰とはかくの如きものであり、歌道思想を取入れて能樂論を展開することは、早く世阿彌に創まるところだつたといふことになる。川瀬博士は自説を裏づけるために、世阿彌が歌道に深く求めてゐた事實を證するものとして、世阿彌が禪竹に與へた傳書『六義』を挙げられた。これは九位の内の妙花風・寵深花風・閑花風・正花風・横精風・強細風を、おのおの風・賦・比・興・雅・頌の詩の六義に配當し、かつその心を『古今註』を引用して説明したものである。そして又十躰に關しては、『拾玉得花』とは獨立に、「十躰之事」だけを傳へてゐる金春安住筆録本・林氏喜手寫本の存在を指摘して、世阿彌著作としての可能性を強調せられた。ただその場合、安住筆録本・氏喜手寫本のいづれもが、禪竹の手を経て傳へられたものであることを、博士はことさらに軽く考へようとしてゐる。それは吉田博士認定本を以て、世阿彌著作の『拾玉得花』と認めようとする意識が、知らず識らずの間に働きかけたためであらう。ともあれ、さうした繁雜な考證の手續を必要としたといふのも、一に信賴するに足る證本が発見されなかつたことによるのである。そしてそれは、此度の金春宗家所藏本の發見によつて、世阿彌著作の『拾玉得花』は、吉田博士認定本とは全く内容を異にするものであるといふことが、新たに判明した。それでは吉田博士認定本は如何なる性質のものであつたかといへば、川瀬博士の最初の所説の如く、世阿彌の「五位音之次第」に、禪竹が自己の「十躰之事」を附載して一書を成したと考へるのが、最も妥當の説であるといふべきである。

前にも述べたやうに、金春宗家所藏本は世阿彌自筆の原本ではない。けれども、八左衛門安喜が書寫した他の傳書類の副本と同じく、金春宗家に傳はる世阿彌自筆の原本を出来るだけ忠實に寫しとつたものであることは、それが一子相傳の家傳印可の證として筆寫を許されたものであり、そして父の八郎安照がそれに奥書を加へて證明してゐることによつても明かである。もつとも子細に本文を點檢して行くと、世阿彌・禪竹の判まで模寫してゐるが、その一方では「稽古」の「稽」字を「秋」と「首」の二字のやうに書いたり、「休」を「体」に、「注」を「住」に、「勸」を「動」に、「木」を「來」に、「微」を「山」と「汲」の合字に、「暉」を「暉」に、「態」を「熊」に、「故」を「政」に、「末」を「未」に、「ら」を「ゝ」に、それぞれ誤つてゐる。最も多いのは「然」を「就」に誤り記してゐることで、その外には「さるほとに」を二度重ね書いて、見せ消ちにしたところもある。これらは世阿彌自筆本の誤そのままであるか、或は筆寫の際に於ける安喜の誤であるか、いづれとも斷定することは出来ない。勿論安喜の誤寫が全くないとはいへないが、さうかといつて、全部が全部、安喜の誤寫だともいへないであらう。

又本文から奥書に至るまで、全卷にわたつて、朱を以て句讀を施し、假名を振り、漢字を宛て、行間に出典或は解釋を注記してゐるが、これも、世阿彌自筆本をそのまま寫したものであらうか、それとも後になつて加へたものであらうか。世阿彌が最初から自分の文章に一々讀假名をつけ、漢字を宛て、出典や解釋の注記をして與へるといふことは、まづ考へられないことであるから、これはやはり後になつて禪竹が加へたものであらう。禪竹は二十四歳の正長元年にこの書物を相傳して、四十九歳の享徳二年になつて、どういふつもりか、自分の奥書を加へてゐる。或はこの時、嘗て「若年之時師家」から相傳した本書を讀返して、その後の稽古によつて自得したところを書入れたのではないかとも考へられるが、しかしそれにしては、いまだ讀假名をつけたり、漢字を宛てたりする必要があるとは思はれない。かうした傳書相傳の手

續を明かにしないけれども、後世のやうに形式的になつてしまつた時代とは違つて、最初相傳の時には、師家から附與せられた自筆の原本を前に置いて、その読み方から字句の解釋、文章の意味まで講義を聞いたのではないかと思ふ。だからこれは、禪竹の書入れであるが、世阿彌がさういふ風に讀ませ、さういふ意味で書いたといふことを示してゐると考へてよいと思ふ。いづれにしても世阿彌自筆の原本の存亡が不明である今日、この金春宗家所藏本は、現在唯一の貴重な證本であるといはなければならない。

禪竹がこの書物を世阿彌から相傳したのは、彼が二十四歳の年の正長元年六月一日のことである。同じ年の三月九日には、前に言及した『六義』を附與せられてゐる。更に遡つて十五歳の應永二十六年の八月には、恐らく金春太夫になつたばかりの彼に、『音曲聲出口傳』が讓られてゐる。『音曲聲出口傳』と『六義』とは、いづれも禪竹の「懇望」もしくは「所望」によつて、世阿彌から相傳せられたのであるが、この『拾玉得花』は、「金春太夫藝能見所有依」つて、特に世阿彌から相傳せられたものである。勿論奥書の書き方は違つても、世阿彌から祕傳を相傳した事實に變りはないけれども、『拾玉得花』を附與せられた頃の禪竹は、その藝能の向上發展の可能性あることを、世阿彌から期待せられてゐたことが判るのである。もつと後のことであらうと思ふが、世阿彌の嫡子十郎元雅は、「こんはるならでは、當道の家名を、後世にのこすべき人躰あらず」といつて、世阿彌が「一大事の祕傳」としてゐた『花鏡』の一見を禪竹に許したといふことが傳へられてゐる。世阿彌自身も、「金春太夫、藝風の性位もたゞしく、道をまもるべき人」と認め、元雅早世後の永享九年八月には、一子相傳の『花鏡』を正式に禪竹に相傳してゐる。けれども正長元年頃には、いかに「藝能見所有」りとはいつても、家の掟を破つてまで、觀世の家の一子相傳である「花傳、年來稽古より物覺、問答、別悟、至花道、花鏡」等を相傳することは事情が許さなかつた。そこでそれらの傳書に説くところを要約して、別の形で禪竹に與へたのがこの『拾玉得花』である。

『拾玉得花』は、『花傳書』の「問答條々」と同じく問答の形式で、六ヶ條の問と答から成つてゐる。そして又、『問答條々』と同じく能の實演に即して、最も重大な問題である「花」の解明を志してゐる。その點では『花傳書』と共通したところがあるが、しかしその説くところは、「花傳、年來稽古より物覺、問答、別昏、至花道、花鏡」のすべてにわたつてゐる。つまりこれは、世阿彌能樂論の精粹である。精粹であるばかりでなく、世阿彌がこれまでに書いた工夫公案を重ねて來たところを、最後に要約して書いたものであつただけに、その思想は成長圓熟の跡が見られ、その説明の仕方はより行届いた手に入つたものである。それは直接原文について、對話問答の進行を辿るうちに、自ら看取されるであらう。

問答の相手は誰か判らないが、少くとも禪竹ではない。恐らくこれは架空の人物であらう。そしてこの架空の人物を相手に、世阿彌自身が、多年の舞臺經驗を通して體得し又反省したところを、自問自答の形で展開して行く。かういふ對話の形式を彼は何から學んだのか知らないが、最も複雑難解な問題を或は表から或は裏から、手近かなところから次第に奥深いところへと、方角を變へたり適當に廻り道をしたりして、説きほぐして行くのに適當な方法であるといつてよい。ところで對話のきつかけは、「その時その場所によつて、藝に出來不出來のむらを生じるのは何故だらうか」といふ、およそ舞臺に立つ者の誰もが經驗する、最も素朴な共通の疑問から始められる。

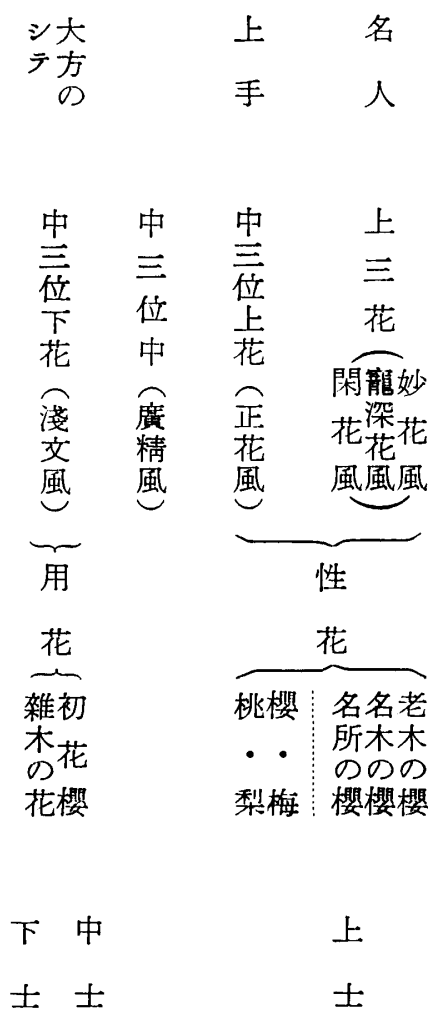
これに對して世阿彌は、「即座和合」或は「當氣和合」の成否が、その時その場所に於ける藝の出來不出來を左右すると答へる。そして「即座和合」を成就する方法として、陰陽の調和を考へて「當氣」に「我意」を念籠し、「時の調子」に衆人の心耳をひきよせ、「音曲の聲文」をなして「音感」から「見風」の幽玄に一座の感動を盛上げて行くことを説く。これは既に『問答條々』の第一に、「當日にのぞんで、先、座敷を見て吉凶をしる事」の項を設けて説いたところであり、更に『花鏡』に於て「一調・二機・三聲」・「先聞後見」・「時節當感ノ事」と標して細説したところでもある。随つてその説は從來より一步も出てゐないが、その説明の仕方は從來よりも一層詳しく、行届いてゐて親切である。

その時その場所によつて藝に出来不出来のむらを生じるといふことは、舞臺に立つ演技者の側の問題である。これを見所の観客の側からいへば、「同じシテの藝が、その時その場所によつて、面白かつたり面白くなかつたりするのは、何故であらうか」といふことになる。このやうに第一の問題を裏返して、見所の観客の側から考へたのが第二の質問である。

ここでも世阿彌は、最も身近かに、しばしば遭遇する立合勝負の場合を例に引いて、問題にしてゐる。即ち「年來稽古の劫を積んだ名人上手の藝も、それからまだ歌舞二曲の修行中で、物真似の稽古も出来てゐない童形の初心の藝も、どちらも同じやうに面白く感ぜられる時があるが、それはどうした譯であらう。その面白さは、果して同じ質のものなのであらうか」といふのである。この問題は、やや形を變へて、『問答條々』の第二に取扱はれたことがあつた。そこでは、「劫入りたる名人のシテが、ただ今の若シテに、立合勝負に負けることがあるのは何故か」といふことになつてゐる。これに對して世阿彌は、「時分の花」と「まことの花」の喩を持出して説明し、この「花を知る」ことが大切だといふことを説いた。そして『別番口傳』では更に、「ハナト、ヲモシロキト、メヅラシキト、コレ三ツハナジコ、ロナリ」といふ「花の公案」を説明してゐるが、本書でも彼は「花」の問題を持出して説明してゐることは、從來と變りはない。しかし「花」は、シテの藝の「位」であると同時に見所の観客の「見風」である。演技者の藝の「位」に上・中・下の三品九等があるやうに、観客の身分にも上士・中士・下士の三階級がある。「上三花」（妙花風・寵深花風・閑花風）の名人の藝を面白と見るのは、「上子（士）の見風」であり、「中三下位」（淺文風）の大方に得たるシテの藝を面白と見るのは「下子（士）の見風」である。随つて名人上手の藝も童形初心の藝も、ひとしく面白いと見るのは、シテも見所も、「その分／＼の心眼」によるのだと説いてゐる。この點は從來より一步を進めた新しい考へとして、大いに注目しなければならぬ。

もつともこの考へは、今初めてここに現れたのではない。既にそれは『花傳書』の「奥儀」に、「目きき」と「目きか

ず、「上根上智の眼」と「遠國田舎のいやしき眼」とを分ち、又『花鏡』の「批判之事」にも「目利」と「田舎目利」とを區別して、見所の褒貶の沙汰に言及した箇所にも現れてゐる。しかしそこで問題になつたのは、「一座建立」・「壽福増長」のために、いかにすれば、この「遠國田舎のいやしき眼」にもげにもと思ふやうな能をして見せることが出来るか、そして「衆人愛敬」を獲得することが出来るかという觀點からであつた。随つてその説くところは極めて斷片的であつたが、本書では正面から面白さの質の相違を取上げて、シテの藝の「位」と觀客の「見風」とが互に相應するものであるといふことを、はつきりと述べてゐる。そしてそこに新しく考案せられたのが、「性花」と「用花」といふ術語である。これは或意味では今までの「まことの花」と「時分の花」とに相通ずるものを持つてゐるが、「花」によつてあらはされた從來のシテの藝の「位」についての比喩と觀客の「見風」についての比喩とを、一語にして綜合調和した、全く新しい術語である。即ち世阿彌の説くところを圖に示せば、次のやうになるであらう。



「性花」の「性」は、佛教では「體」の別名としても用ひられ、その意味では「用花」に對應する命名であると思ふが、時に「正花」とも記し、また「中三位の上花を、既に、正花とあらはすうへへ、櫻木なれ共」といつてゐるところを見る

と、これは連歌の「正花」と「正花ならざる花」の考へ方から導かれたものであらう。ただその場合、既に『九位』に於て中三位の上を「正花風」と命名した點から、これと區別するために「性」の字を選んだのではないかと思はれる。後年、禪竹が『六輪一露』を著して、世阿彌の『九位』を佛教哲學を以て再構成した際、上三花を壽・豎・住の上三輪に配當してこれを「性花」とし、中三位・下三位をそれぞれ像・破の二輪に配當してこれを「用花」としたのも、その基くところはここにあつたのである。

同じく面白いと感ずるのにも、そこに質的な相違があるといふことは、「花」の比喻によつて明かになつた。しかしさうした比喻分別をはたらかせる以前に、我々は一樣に面白いといつてゐる。「いつたいほんとうに面白いといふことはどういふことであるか」。問題はいよいよ藝術的感動の祕密の核心に迫つて行く。

これに對して世阿彌は、「以前申つる、面白と云、花と云、めづらしきと云、此三は、一躰異名也」といつて、既に『別昏口傳』に説いたところを繰返してゐる。しかし單なる繰返しに終らないで、更にこれを分析して、「妙」・「花」・「面白」の上・中・下三等に分つて説いてゐる。このところは極めて難解であるが、少くとも從來、同じ平面で「一躰異名」と考へて來た「面白き」と「花」と「めづらしき」とを、「上中下の差別」をつけて階層的に考へやうとしてゐることが知られる。即ち最も純粹な感動は、無我無心の境地に起る。それは言語を絶したもので、強ひていへば天台の釋にいふ「言語道斷不思議、心行所滅之處、謂之妙」である。別の言葉でいへば「無心の感」である。その時には、「面白い」とか「美しい」とか感ずる餘裕はない。ただもう「うれしき心」だけで、覺へず「微笑」するといふのが實情であらう。これが「妙」である。しかしその感動の陶醉から覺めて、その「面白さ」・「美しさ」を反省し分析する時、そこに「花」が現れて來る。或は「無心の感」に達しないまでも、批判の眼をはたらかせて舞臺の演技を見てゐる時、觀客の「その分くの心眼」に應じて、「花」を意識し面白いと感ずる。「上士」もしくは「目きき」には名人上手の「花」が、「中士」・「下

士」或は「目きかず」には大方に得たるシテの藝が、それぞれの「花」と映ずる。これが「花」である。けれども大部分の観客は、素朴にただ「面白い」といつて済ませる。彼等といへども、何か心に感得するところがある筈であるが、それを「面白い」の一語ですべて片付けてしまふ。これがいはゆる「面白き」である。「一點付る」といふのはよく判らないが、恐らく和歌・連歌の合點から來た言葉で、ちよつと批評する、感想を述べるといふほどの意に用ひられてゐるものと思ふ。

しかしながら、深いにもせよ淺いにもせよ、さうした観客の感動は、シテの藝によつて喚び起されるものである。随つてそれはシテの藝の「力」或は「位」と、全く無關係であるといふことは出來ない。既に九位第一に定位した「妙花風」を得た名人が、無心の境地に遊んで「舞歌の曲をなし、意景・感風の心耳をおどろかす」時、「おぼへず見所の感應をなす」のである。これをこそほんとうの面白さといふものであるといふ。これについては、『花鏡』の「事書十二ヶ條」の内の「上手之知感ノ事」が想ひ出される。既にそこで世阿彌は、「初心よりもしろき所のあるも有」といひ、しかし、「次第／＼に上手のくらしいにいたれ共、をもしろきとをもふは又べち也。又をもしろきくらしいより上に、心にもをぼえずあつと云重あるべし。是は感なり」といつてゐる。これはシテの側からいつた言葉であるが、「面白き」といふ内容を分析して、階層的に考へようとしてゐることが注意せられる。そして更に、それをシテの藝の「位」に對應せしめて考へようとしてゐるのも、本書に先んずるものといふべきであらう。

面白さの極致は「無心の感」にある。その「無心の感」をなし、或は「無心の感」を持ち得る人といふのは、「妙花風」を得た名人である。ところで「稽古の條」に、安き位といふことが見えてゐるが、これはつまり、無心の感・妙花の所と同じ意味なのであらうか。これが第四の質問である。ここにいふ「稽古の條」とは、『花傳書』の「年來稽古條」には「安き位」といふ言葉は見當らないから、これは『九位』の「九位習道の次第條」を指していつてゐるのであらう。

そこでは「中初・上中・下後」といふことを説明して、二曲の稽古に淺風の文をなして、次第に廣精・正花と得法し、最後に妙花の「安位」を経てさて却來して、無心無曲に、自由に下三位の風にも遊ぶ境地に到達することを説いてゐるが、ここに述べるところはほぼそれと同趣旨である。ただここでは、中三位・下三位を習得したシテにも、「其の分／＼の安位」があることを認め、なまじいに「堪能妙花の藝人」の「安曲」を模倣することなく、その得たる分々の「安曲」の風體を演ずることを勧告してゐるのは親切である。これは『花鏡』の「事書十二ヶ條」の内「習道智の事」と相通する。そしてここに臨濟の「無位眞人と云文」を引き、同じく「悟々同未悟、悟了同未悟」の禪語を挙げ、自得慧暉禪師の『六牛圖』第六偈を引用してゐることは、やや注意するに足ると思ふ。

次に「一切萬道成就」といふ言葉は、世阿彌のどの傳書にも見當らない言葉であるが、多分それは、遊樂は一切の萬道を成就するものだといふ、世阿彌の理想を現した標語であつたと思ふ。ところで問者は、「これはただ字面の通りの意味であるか、それとももつと深い意味があるのであるか」と問ふ。これが第五の質問である。世阿彌はこれに對して、やはりこれも「面白き心」と關係があるといふ。いふ心は『花傳書』の「祕義」に、「抑々藝能と者、諸人の心をやはらげて、上下の感をなさん事、壽福増長のもとひ、かれい延年のほうなるべし。きわめ／＼ては、諸道悉に壽福延長ならん」といふところと、同一趣旨に出るのであらう。そしてその成就について大切なことは、「序破急」であると説く。「序破急」が成就せられるところに、「萬曲のおもしろさ」が成就せられ、「萬曲のおもしろさ」を得て初めて、「一切萬道成就」の藝能の理想が實現せられるのである。「序破急」については、既に『花傳書』の「問答條々」や『花鏡』の「事書十二ヶ條」其他に、繰返し説いてゐるところである。それらはいづれも能の演出の時間的進行について述べてゐるのであるが、ここではこの原理が、「萬象森羅、是非大小、有生非生」のことごとくに具はるものであり、そしてそれがいはゆる「あはれ」をもよほし、「おもしろき心」を動かす根源であるとする點で、從來よりも更に徹底してゐることを知るのである。

最後の質問は、第五の「安き位」についての質問と關聯がある。「人おのおのその藝に我が得たるところがあるが、その我意分について何か別に注意するところがあるか」といふのである。これに對して世阿彌は、九位の上三位・中三位・下三位それぞれに、その得たる位があり、その得たる位に任せて演ずるのが「我意分」といふものであるが、それはただ我が得たりと思ふところを「おしあてがいに事をなさんと」することであつて、「眞實の我意分」といふことは出来ない。「眞實の我意分」とは、「舞歌の二曲」を十分に習得し、老・女・軍の三體はもとより、鬼神・物狂ひの風體に至るまで、その性根を究め盡して、これを似せるといふよりもこれを自分のものにこなしきつて、そのものになりきつてこそ、初めて「我意分」を盡すといふことがいはれるのである。これを「誠の物まね」とも「有主風」ともいふ。その境地を「安き位」といひ、「定位本風の我意分」といふのである。このことは既に、『至花道』の「無主風事」や『二曲三鉢繪圖』などに詳説したところであつた。

以上これを要するに、本書は「花傳、年來稽古より物覺、問答、別番、至花道、花鏡」等の家の祕書を相傳する代りに、その要を拾つて、花の奥儀を禪竹に傳へたものである。『拾玉得花』の題號は、實にそこに由來する。そして本書は、世阿彌としてはそれらの書物の成つた後に書いたものであつただけに、その思想は圓熟し、その説くところ周到であり、しばしば見るべき新見のあること、前に述べた通りである。その意味に於て、本書發見の意義は極めて高く評價せられなければならないと思ふ。因みに終りに當つて、本書の披見を許された金春宗家、ならびにその仲介の勞を執られた金春文學士に對して、厚く謝意を表するものである。

註

- (1) 金春文學士は、その卒業論文「拾玉得花について」に於て、金春宗家所藏に世阿彌作と推定せられる『拾玉得花』の傳本の存在することを報告してゐる。しかし右卒業論文に扱つたのは、世阿彌の『拾玉得花』が

世阿彌の「拾玉得花」について（野間）

- 主題ではなく、専ら吉田博士認定本を中心として、禪竹の「五音十鉢説」を究明したのであつた。
- (2) 「世阿彌著作『音曲五位』の發見」昭和十六年二月發行雜誌「實生」第二十卷第二號、昭和十八年六月「日本書誌學之研究」再録。

- (3) 「音曲五位の著者」 昭和十六年四月發行雜誌「潮世」第十卷第四號、
(4) 「拾玉得花は世阿彌の著作」 昭和十六年十二月發行雜誌「寶生」第十卷第十二號、後に「日本書誌學之研究」再録。
(5) ただ一箇所、即ち第三問の「無心の感」の説明に『易經』の一節を引

用した部分だけは墨書である。これは世阿彌の原注であるか、それとも他の朱注と同じく、禪竹の後注であるかどうか、不明である。注記については猶研究の必要があるが、禪竹の著書にしばしば現れて来る同一の語句があることは、注目に値する。

拾玉得花

・問・遊樂成・於・當藝・年來のたしなみの條々・意曲をつくし・成功をつみて・我意分の藝能をいたす事・ゆるがせならずと云へ共・即座によりて・出來時イテも有・又出イテこぬ時アも有也・故如何そや・答・諸藝の當座ニおいて・出來・出不來イテ甲乙有・是コレちからなき時節シセツと申なから・稽古安心キコアシンをなさハ・なとか・出・不出フシユツの・其ゆへをしらざらん・是・なをもたしなみの・不及フキミにして・おろそかなるゆへかとおもふ」(二オ)ところに・同上手・同藝風ドウギフウをなす當座タウサにも・なとやらん・昨日ハ出來・今日ハ出不來イテ見風有・さりとてハ・風月延年フクツエンネンをなす藝の身アにてハ・かなハざらんまでも・くふうして・不審フシンをひらかん事・本意ホンイなるへし・抑同上手・同堪能カンノウをきわめたる・曲風キョクフウの・當座によりて・甲乙カウイの有事アル・若・おりふしの時シ分フ・陰氣インキ・陽氣ヤウキの・和ワせぬ所なるか・四氣シキおりく・日夜ニチヤ・朝暮チウボ・きせんくんじゆの・他少タセウ・廣座クワウサ・少座セウサの』(一ウ)當氣タウキによりて・藝人の・時機音キキオン・時の調子テウシの五音イン・相當サウタウせすハ・當氣タウキ和合ワガフあるへからず・先・當日タウの氣キに・我意カイを念ニ籠ロウしあはせて・音聲オンセイの曲文キョクモン・時の調子テウシニうつり合アイて・數人の感音カンオンをなさん事・即座和合ソクサワガフの入門也・又・暖氣寒氣ウンキカンキ・日夜ニチヤ・朝暮チウボの時シ節セツに和する・音感オンカンなるへし・寒ハ陰イン・暖ハ陽ヤウの時トキなれハ・陰氣ニハ・陽ヤウを和ワし・陽氣ニハ・陰インをあわせて・聲感セイカンをあてかふへし・陰陽和インヤウワする者』(二オ)自然シゼン・座幾サシキ(數)の天氣テンキ・陰氣インキなんとにて・物さひたるけしきならハ・陰氣インキそと心得ココロエて・陽聲ヤウセイ・永曲エイキョクを・相音アイオンに・体キツ(休)息ソクして・音感オンカンをなすところ・是・一座成就サシヤウシュの・感應也其感應カンオンより・見風ケンフウにほふ・舂風チウフウ尚ナカ江月照松風吹本夜清聲所作ナカエツツキマサカゼフクキタマヨキヨウセイソサク・爰・面白オモシロシと見る數人感應也・如此曲感コノキョクカンに・和ワする成就セウジユをや・出來る・時分と申へき・又・當座・陽氣ヤウキかと思時オモトキハ・音

聲に・息をつめひらきて・陰聲を・舐にして・調感をもよほして』(三ウ) 數人の心耳を・ひきよせ・ひきをさめて・音力をなすへし・又・たとひ・秋暮・三冬陰氣なりとも・若・當時の日頭もうらゝに・見物衆もくんじゆしたる・當座にて・

人氣・人音なんとのミにて・しミかねたる當庭にも・相音の高聲をもて・數人の心耳ニ通せしめて・爲手一人へ・諸人の目心をひき入て・其連聲より・風姿にうつる遠見をなして・萬人一同の感應となる・褒美あらハ・」(三オ) 一座成就の遊樂なるへし・是まづ・音感の入門より・見風にうつる堺なるへし・花鏡に・先聞後見と住(注)したるハ此心也・此あて

かひハ・貴所廣座・少座・庭前・屋内・ないしかりその座式の・音曲なんとにいたるまでも・其時くのもやうによりて・あてかふへき事・すこしもたかふへからず・動(勸)進・大庭の申樂ハ・天地人の三才の氣ニ通じ・庭申樂内能なん

とハ・人氣の舐(三ウ)のミにて・天氣ハ用になる事あるへし・如此の當座くのあてかいの・安・不安の差別によりて

・出・不出の・甲乙もあるかとおほえたり

・問・誠・其おりきげんによりて・出・不出の甲乙あるへき事うたかないなし・此藝道に・稽古長久にして・既に・名をう

るくらいになりて・おもしろやとおもふ見感・是ハ成功なりと見る所に・二曲の位・いまたがんぜん・初心にて・正

(四オ) 兒姿・遊風の時分にも・おもしろやと見る事あり・是ハ・成功の達人の・おもしろきと・おなし心なる位やらん・

是不審なり・答・此段ハ別番にあり・面白心を・花にたとへたり・是・めつらしき心也・この心をきわむるを・花をしる

と云り・花傳にみえたり・抑・花とハさくによりておもしろく・ちるによりてめつらしき也・有人問云・如何無常心・

答・飛花落葉・又問・如何常住不滅・答・飛花落葉云々』(四ウ) 面白とみる即心に・定意なし・さておもしろきを・諸藝

にも・上手と云・此おもしろさの長久なるを・名をうる達人と云り・然者・おもしろき所を・成功までもちたる爲手ハ

・飛花落葉を常住とミンかことし・しかれ共・又大かたの花を・見するしてあるへし・既に・九位とたて・上三花ハ申

ニ不及・中三下位の藝にも・おもしろき所あらハ・又その分くの花なるへし・假令・雜來(木) なんとの花をハ・田夫

野人」(五五)とうのおもしろと見ん事・是・下子の見風なるへし・上三花をおもしろやとミンハ・上子の見風也・爲手も

禮記六子子問道勤中子問道如相如亡子問道如(抱)手太笑イ笑以不可道云

・見所も・その分／＼の心眼也・爰ニ・私のあてかいあり・性花・用花の兩條を立たり・性花と者・上三花・櫻木なるへ

し・是・上土の見風にかなふ・位也・中三位の上花を・既に・正花とあらハすうへハ・櫻木なれ共・此位の花ハ・櫻木に

もかきるへからず・櫻・梅・桃・梨なんとの』(五ウ)色々の花木にもわたるへし・ことに・梅花の・紅白の氣色・是又・

みやひたる見風也・然者・天神も御やうかんあり・又云・當通の感用ハ・諸人見風の衰見をもて・道とす・さるほとに・

此おもしろしとみる事・上土の證見よ(ママ)り・然共・見所にも甲乙あり・縦ハ・兒姿遊風なんとの・はつ花さくらの一

重にて・めつらしくみえたるは・是用花也・これのミおもしろしと・衰見するハ・中子」(六オ)下子とうの目位也・上土

も一たんめつらしき心たて・是にめづれ共・誠の性花とハみす・老木・名木・又ハ・吉野・志賀・地主・嵐山なんと

の・花ハ・既ニ・當道に縦ハ・出世の花なるへし・かやうなるをしるハ・上土也・上下万ミン・一同に諸花ほうひの見風

なるへし・上土ハ・廣大の・眼なるほとに・又餘花をもきらふ事あるましき也・爲手も又・如此・九位・いつれをもこの

さゝらんをもて・廣』(六ウ)覺の爲手とハ申へし・万法一ニきす・一いつれの所にかきす・万法にきすと云々・如此その

分／＼に依て・自然／＼に・おもしろき・一躰／＼のあらんをハ・諸花と心うへし・しかれ共・兒姿のおもしろさと・成功

の・達人の・おもしろさも・同心かとの不審をひらかんかため・性花用花の差別を申分る也

・問・抑・此面白と名付そめし・所得・何故そや・花と見」(七オ)るもたとへならは・たとへすしらぬ所に・面白と云は

しめし本來如何・答・是ハ・既に・花をさとり・奥義をきハむる所なるへし・以前申つる・面白と云・花と云・めつらし

きと云・此三ハ・一躰異名也・是・妙・花・面白三也と云へとも・一色にて・又上中下の・差別あり・妙者・言語を絶て

・心行所滅也・是を妙と見るは花也・一点付るは面白き也・夫・面白と名付之事・天香久山の・神樂の・』(七ウ)遊樂ニ

めて給ひて・大神・岩戸を・ひらかせ給ひし時・諸神の面・こと／＼くあさやかに見えそめしをもて・面白と名付そめ

られし也・其きハをハ・おもしろしとも云へからず・面白とハ・一点付たる時の名也・一点不付・以前をハ・なにと云へき・爰ニ・當道の安心によせて・是をミるに・遊樂の面白とミる・即心ハ・無心の感也
ハ・無心感とハ易ニハ・誠感の即心ニハ・心持なき故ニ・然レ云文字の即心をよませたりと云

・抑・大神・岩戸をとちさせ給て・世海國土・とこやミとなて」(ハオ)りやうあんなりしに・おもはずに・明白となる切心ハ・たゝうれしき心のミカ・觀喜なるへし・是・おほえすして・涙(微)笑する機なるへし・岩戸をとち給て・りやうあんにて・言語を絶たりしハ・妙・既に・明白となるハ花・一点付るハ・面白なり・就(然)者・無心の感・即心ハたゝ・觀喜のミカ・おほえす涙(微)笑する機・言絶(語)絶て・正ニ・一物もなし・爰を・たえなると云・たへなりとうる心妙花也・さてこそ・九位第一にも・妙花をもて・金性」(ハウ)花とハ定位し侍れ・舞哥の曲をなし・意景・感風の・心耳をおとろかす堺・おほえす見所の・感應をなす・是・妙花也・是面白也・は無心感(感)也・此・三ヶ條の感ハ・正ニ・無心の切也・心ハなくて面白とうけかうハ・なん物そ・性ハ物をうけかはす・就(然)者・九位金銀性ハ・見風の曲文ニハ・感すへからず・心うへし・おほえすして涙(微)笑するハ・うれしきのミ也・月菴和尚云・うれしき事はいはれざりけり」(九オ)この上を・人々に次せられけると也

・問・稽古の條々に・やすきくらいと云り・是ハ・無心の感・妙花の所と同意なるへきやらん・答・是ハ安心也・たゝ無心の感・妙花同意也・さりながら・其位の・有主風を得こそ・眞實の・やすきくらいなるへけれ・無位眞人と云・文あり・形なき位と云・たゝ無位を・誠の位とす・是安位・當道も・花傳・年來稽古より・物覺」(九ウ)問答・別番・至花道・花鏡・如此の條々を習道して・奥藏をきかめ・達人になりて・なにと心まゝなるハやすきくらいなるへし・就(然)云へ共・猶も是ハ・稽古を習道したる成功の安位也・しからハ無心とハなをも申かたし・抑・安位者・意景・態相ニ・全くかゝらぬ所あるへし・其時ハ・稽古・習道をつくしつる條々・心中に・一物もなし・一物もなきと云も・又・習道の

・成功力也・恒(悟)・同(十オ)末子(悟)云・自得(暉)和尚云・命根斷處・絶後再甦・隨・類・受・
 身云・又云・精(精)金・火裏逢・不變・皓玉・泥中有・果如云・此藝如此・中三位より・上三花をきわめぬれ
 ハ・下三位ましはるも・其爲手の位・上三花の定位のまゝなるへし・是・砂の金・泥に連(蓮)花・ましはるともそむ
 (へ)からす・此位の・達人をこそ・眞實の・安位とも云へけれ・是万曲をなすとも・心中に・やすしとたにもおもふへか
 らす・無曲・無心の(十ウ)當熊(態)なり・此位をや・本無妙花とも申へき・就(然)ハ・堪能・妙花の藝人の・此安
 曲を・なすをみて・初心のして・やすき所をまなはん事・天に手をあけて・月をうたんとせんがごとし・なをし・中下三
 位とうの爲手までも・心うへし・さりながら・九位においてハ・中三位とうを習得したらん爲手ハ・其分／＼の安位にい
 たり・下三位の分藝ハ・又その・分力の・安位をなさん事・是又・しさいあるへからす(十一オ)たゝその・一跡／＼を得
 たらん曲藝ハ・又その・分／＼によりて・安曲の風躰・遠見をなさん事・藝道の感用たるへし
 ・問・一切・万道・成就云・是はたゝ・自面のことくか・又深き有か・故如何・答・成就とハ・なりつく也・就(然)
 ハ當道においてハ・是もおもしろき心かとみえたり・この成就・序破急に・當り・故如何となれハ・なりつくハ落居なり
 ・ゝゝゝなくてハ・心／＼成就あるへからす・見風成就する・(十一ウ)面白切也・序破急・流連ハ・成就也・能／＼安見する
 に・万象・森羅是非・大小・有生非生・こと／＼／＼のおの／＼序破急をそなへたり・鳥のさへつり・虫のなく音にい
 たるまで・其分／＼のことハりをなくハ・序破急也・しかれハ・おもしろき音感もあり・あはれをもよほす心も有・是成
 就なくハ・おもしろしともあはれさともおもふへからす・抑・當道の藝能ニ・序破急の事・花傳・花鏡に(十二オ)くわ
 しく見えたり・先・申樂の當庭番數みちて・諸人・一同のほうひをうるハ・其日の・序破急の成就の政(故)也・是目出
 とき落居也・如此大かうの見物・諸人一同の目前・感應の成就也・又・其・番數の次第／＼・一ばんつゝの内に・序破
 急成就あるへし・又・一舞一音の内に・おもしろきハ・序破急成就也・舞袖の一指・足踏の一響にも・序破急あり・是

ハ・筆作に不及・口傳（十二ウ）有・面白ハ見所一見の序破急・成ところの一風ハ・藝人の序破急也・見所人の・あつと感する・一音にも成就有・時節の感にも・其・一音・五音にかなうハ・呂律の序破急なるへし・若・一音のうちなりとも・うたるなから心もなくて・音感と、かすハ・面白かるましき也・それハ序〇までにて・急にハおさまらぬ聲流なるへし・まして成就なにかあらん・さるほとにさるほとに・面白かるましき也（十三オ）此意を得すハ・曲心の序破急も成就あるへからず・私云・一調二機三聲も・調子をふくむハ序也・機を出すハ破也・既に出聲急也・此三・心耳に感をなし・面白ハ成就也・就（然）者・万曲ニ通して・一風・一音・一彈指の機にあたるも・序破急成就也・莊子云・鵲のはきみしかくとも・つかはうれへなん・鶴のはきなくとも・きらハかなしミなん云・長短・大小・平同にして・おのく（十三ウ）序破急同・此意を所得せは・我意も・序破急成就なるへし・同・我か・曲風の是非をも・分明にするべし・しからは是ハ・相足・非を知て・是をさらハ・一藝無上の・堪能なるへし・此時こそ・心性の・序破急も成就・見得すへけれ・た・万曲のおもしろさハ・序破急成就の故と知へし・若おもしろくなくハ序破急・不成就とするへきなり・おそれくハなを此心・得事如何・奥藏心性をきハ（十四オ）めて・妙見に至ハ・是を得へき歟能ニ安得ノ見聞所數ニ見所數ニ面白成就也上云不面白不成就下云云

・問・諸藝をなす人・面白・我意分の・所得有・此・我意分と申ハ・別に心うる所あるへきやらん・答・この我意分と云事・當道の藝能に・心うへき事おほし・先九位においてハ・上三位をゑたらん爲手ハ・其風躰をなさん事・我意分なるへし・是既に・上果なるへし・中三位ハ・又そのかいふん也・下三位とうみなく（十四ウ）そのくらゐを得たらんにまかせて・我意分あるへし・みな・是までと心えたるはかりにて・眞實の・我意分にわたる所をしらす・誠の物まねに・入ふさすハ・このがいふんをうる事あるましき也・先・三躰において・老躰の物まねをなす事・人形云・閑心・遠目と名付けたり・心しづかにして・目をとく見よと也・是・老躰の風躰也・是によく身なりをも・心をもなして・さて二曲を（十五オ）いたし・立ふるまう人躰をも・それになりかへりて・藝風をいたさハ・是老躰の我意分なるへし・又・女躰ハ・

心ヲ器ニ能成サハ即力ハスルヘシ

チカラ

マコト

躰心捨力と名付・心を躰にして・力をすつるあてかいに・誠に成かゑりて・さて・二曲をいたさハ・是又女躰のかいふん

也・又軍躰・躰力碎心と名付・力を躰にして・心をくたく所を・よく／＼心人にあてかゑりて・さて・その熊(態)をなさ

ん事・是・軍躰の我意分なるへし・軍躰ハ・凡・しゆらの』(十五ウ) 風躰なれハ・はたらきと者・きうせんをたいし・う

つ手・ひく手・うけつそむけつ・身をつかいて・あしふミも・さそくをつかふ心根をもちて・さて・人ないをハなたらか

にして・事をハなして・さてあたるましき塚を・よく／＼心えて・はたらくへし・是・軍躰の我意分なるへし・是を・や

ゝもすれハ・あしく心得て・軍躰の躰力碎心の身のまゝにて・又・女躰なんとなる時・躰心捨力をハあてかハすして・

た・女とならハ身を』(十六オ) うつくしくせんとおもふはかりにて・にわかにな女ニ似するほとに・人躰なへて・どちつか

すなれハ・正躰なき風躰になる事あり・それを見所の人・なへたるぞ・よはきぞなんといさむれハ・又もとの・軍躰の心

人へかへるほとに・あらくなる也・是らをハなにとて・女躰の我意分とハ申へきや・たゝよのつねの女も・女に似せんと

ハおもふへからず・もとより女人と生付たるまゝにて・上らうハそのふるまい・下』(十六ウ) 女ハその分にて・おの／＼

のふるまいをいたす事こそ・がいぶん／＼のふるまひなれ・わざと身をうつくしくなさんとたくミ・ゆふけんならんとあ

てかふ事・かなふましき事也・かやうなるしてハ・あらきぞといへハ・たゝ・せず・などせぬぞと云へハ・あらくなる也

・すへき事をするうちにてこそ・つよきも・よへきも・是非の・ひはんもあるへけれ・就(然)者・女すかた・男躰の似

事とハ・一大事なるほとに・躰心捨力と・形木を』(十七オ) をきて・其心人になりかへる風姿・是・女躰の我意分也・そ

のあてかいハなくて・たゝ・女に似せんとばかりハ・女躰のかいふんにてハあるましき也・女を似するハ・女ならず・さ

るほとに・女姿の有主風に・眞實なりてこそ・女のがいふんにてハあるへけれ・此・分目よく／＼心うへし・老躰も又・

如此・閑心遠目を心えて・その分に成入たらハ・老躰のかいふんにてあるへし・三躰いつれも・如此・又物くるいなんと

の』(十七ウ) 事ハ・はちをさらし・人目をしらぬ事なれば・是を・當道のふし物に入へき事ハなけれ共・申樂事とハ是な

り・女なんとハしとやかに・人目をしのふものなれば・見風ケンフウにさのミ見ところなきに・物くるいになぞらへて・舞マユをまい
 ・哥カをうたいて・きやうげんすれば・もとよりミやひたる女すかたに・花をちらし・色香イロカをほどこす見風ケンフウ・是又なにより
 もおもしろき風姿フウシ也就レハ（然）者この」（十八オ）くらいをゑたる爲手シテハ上花なるへし・是・おもしろきかいふん也・又・三
 躰ホカの外・鬼人躰キシンドイなんとハ・是又さるがく事の似事也・誠マコトの・鬼オニを見事あるましき也・假令ケリヤウゑにかける鬼人躰キシンドイなども・似
 すへきかたちハなし・さるほとに大かたをあてかいて・あらかるへき道理タウリをはづしてその・はたらきをこまかに和ワシて・人
 目をばかすこしつ分のふんりき・鬼人躰キシンドイの我意分也・是を・碎動風サイドウフウと』（十八ウ）名付・又・形鬼心人とも云・此あてかいて
 ・能ヨク安得アントクして・其分曲フンキョクをたしくせん事・碎動サイドウの我意分なるへし・如此・數カスの物まね・二曲の習道シユダウ・ことくくいつ
 ハりもなく・藝躰ゲイタク（道）をなさん事・其・曲マクの我意分なるへし・其・あてかる・分目ワケメハなくて・た・おしあてかいて
 事をなさんとせんをハ・我意分とハ申かたし・さるほとにハ・形木カタキの定意なきがゆへに・能ノウにあち』（十九オ）わひ
 なくなりて・老來ラウライニ成行ニナリユクま・能ノウは下るへし・心うへき事也・大學云・其本亂末ソノモトミタスエ（末）不治云・物覺モノサトの其人躰ソノシンドイによりて・
 能ヨク・似ニセおさむるハ・是・其本也・それが誠マコトにおさまらずして・似事ニセコトの曲躰キョクダイ・ゆるがせならハ・有主風ウシュフウにハあるへからず
 ・就シカレハ（然）者・其本亂也・末スエ（末）・可不治カママルヘカラス・又・果不及ワケフキヨリ云り・すぎたるハ・をよばざるにおなしと也・物まねの其
 躰ホカ・すこしもたらさらんも・あまりたらんも・其本にてハ』（十九ウ）あるへからず・此・有主風ウシュフウに・眞實シンジツ・成入ナリイルならハ・
 似ニセとおもふ心・又・不可有アルヘカラス・是を・誠マコトの物まね・有主風とハ云へきなり・此曲躰キョクダイの態風タイフウニ入ふしたらんをこそ・定位本風テイイホンフウ
 の我意分とハ申へけれ・孟子云・爲不固・能爲固スルコトノカタキニアラスヨクスルコトノカタキナリナライニスル云習スル似る事ハ・大かたしさいもなくて・見風ケンフウなた・（ら）かなる
 ハ・する事のかたきにあらぬ分也・眞實シンジツ其物に成入て・名をうる事ハすくなし・是・能ヨクする』（二十オ）事のかたきなるへ
 し・似ニセたる事ハ似たれとも・是セなる事ハぜならずと云・此是をよくく安位アンイして・達人長名タツシンチャウメイの・其物に・至らん事を・可
 得ヘシ

此一帖・當藝習道之祕傳也・爰・金春大夫・藝能見所有依・爲・相傳・所・如此

・正長元年六月一日

もしほ草かきをく露の玉をミハ

見かくこと葉の花ハつきせし

・世阿(花押)』(二十一オ)
ハンマテウツス

此一帖若年之年師家之傳所也

享徳貳年八月日

もしほ草の花も玉もゝかきあつめ

見れは鏡のうらもくもらす

氏信(花押)
セシチクノハンマテウツス

金春八郎

秦安照(花押)』(二十一ウ)

金春家所_レ出於秦河勝歷代祕曲傳家督一人而其他庶子傍孫遂不能_レ窺_レ闔奥於萬一_セ矣雖然如是兄七郎氏勝不幸而早世故老父家傳之祕奥相續而欲傳之子々而孫々而以殘萬世悉家』(二十二オ)傳祕曲教授於所令相傳也今又汝家傳祕曲不遺所令教授也莫令斷絕矣

明曆二年丙申

』(二十二ウ)

正月廿一日

竹田金春八左衛門

秦安喜(花押)

金春七左衛門殿

六十九歲

參

』(二十三オ)